

# 勿凝学問 157

報道における両論併記の罪

選択肢にもなり得ない年金改革論が生き延びてきた理由の一つ

2008年5月27日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

昨日5月26日に、あるところから、社会保障国民会議が行った年金シミュレーションについて次のメールがくる。

つきましては、権丈先生に

①試算から見えてくること

②税方式の問題点

②試算の妥当性・問題点

についてお話をお伺いしたいと思っております。社会保険方式、全額税方式のどちらかに軸足を置くのではなく・・・云々

僕からの返事

> についてお話をお伺いしたいと思っております。社会保険方式、全額税方式

> のどちらかに軸足を置くのではなく、

ここなんですよ。

1 + 1 = 2 という普通のことを言う者がいる。

1 + 1 = 0 という間違えたことを言う者がいる。

報道は中立性が大切と思って、両論併記で記事を書き続ける。

その結果が、今日の状況。

時に、両論併記は、国民を不幸せにする状況を生みます。

ということで、取材は、少し考えさせてくださいませ。

僕は、「勿凝学問 134 [社会保険方式論者ねえ、まあ、悪くはないけど違和感はあるねー](#)  
[プロと素人の見解の相違としての基礎年金財源方式と混合診療問題](#)」(2008年1月31日  
脱稿)で次のようなことを書いている。

ボクは、知り合いの記者に、どうも昨年の11月9日に、次のようなメールを送って  
いるようだね。

- > 追伸
- > 年金については、民主党案、租税方式を否定するための企画には協力いたします
- > が、両論併記の企画には関心がありません。

だって、そうだろう。年金研究のプロで、誰一人も民主党案とか租税方式を支持し  
ている者はいないよ。かつて民主党案や租税方式を支持していた人が、考えを変え  
た人はいるけど、その逆はいない。

そして2月27日にメディアの友達から次のメールが届いている。

「両論併記」は中立性を装うための新聞の常套手段ですが、今回の年金問題のよう  
に「本当は選択肢にもなっていない」ようなケースでは読者の判断を誤らせるリス  
クが大きく、頭の痛いところです。

世間に隠れて、上のようなメールのやりとりをしている最中、僕は2月25日に、断りが  
たいいくつかの事情——記者さんが高校時代の友達の友達だったとか——が重なった結果、  
『毎日新聞』で両論併記のインタビューに答えているようである。相手は、一橋大学の高  
山憲之先生。高山先生は「税方式が理想」という記事の中で次のようにおっしゃっている。

「税方式は、保険料を払ってない人ももらえて不公平だ」という意見もあるが、そ  
れは所得税を念頭に置いた話だろう。消費税なら導入以降、既に20年近くみんなが  
払っている・・・

何をおっしゃりたいのか、僕には理解しかねるものがある。消費税を財源とした基礎年  
金に切り替えた場合、未納者も20年近く消費税を払っているのだから受給権があると言  
いたいのだろうか？ それならば保険料の完納者も20年近く消費税を払っていると  
言いたくなる・・・。相も変わらず、高山先生のおっしゃることはあたまが痛い(勿凝学問 15x [や  
れやれのバランスシート論](#)参照)。

とにもかくにも、メディアってのは中立を装うために両論併記という常套手段をとる癖があるのだけど、年金の全額租税財源化のような場合は、その姿勢は罪だな。その無責任な思考停止の態度が、国民の判断を誤らせ、選択肢にもなり得ない年金改革論を延命させ、選挙の度毎に他の重要な政治案件——医療問題、税制改革など——を締め出してきた理由の一つになっている。メディアがあらゆるテーマについて決め打ちをするのも問題だけど、基礎年金の財政方式程度の簡単な問題は、なにもわざわざ両論併記でまとめる必要はないんじゃないか。そういう意味で、発行部数が日本国内のみならず世界でみても1位と2位を占める『読売新聞』と『朝日新聞』の租税方式否定という社論の決定は、国民にとって運が良かった——ただしその後、『読売』は年金の専門家が記事を書き続け、『朝日』は国民会議マターは社会保障専門ではない部署が書くという組織上の縦割り問題をかかえていたために、この間、『読売』の記事の方が圧倒的に良質という状況になっている。これは個々人の問題ではなく、単純に組織論の問題と僕はみている。

先週の木曜日だったか、11月に行われる日本アクチュアリー<sup>1</sup>年次大会で講演を行うことになり、その打合せに事務局の方が3人ほど大学にきてくださった。その中のお一人が、「先生のご持論を存分に語ってください」とおっしゃったので、僕は「持論？ 医療とかでしたら価値判断も入るために持論と呼ばれてもいいですけど、年金については持論などではなく、ただの論理的帰結ですよ」と。

---

<sup>1</sup> Wikipedia より

アクチュアリー (actuary) は、ビジネスにおける将来のリスクや不確実性の分析、評価等を専門とする専門職である。アクチュアリーの発祥の地は英国であり、伝統的には生命保険の分野で活躍してきた。「保険数理士」「保険数理人」などと訳されることもある。